処女受胎
二人のジャンヌ
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

もくじ

第一章：聖処女の谷間……P4
第二章：尻穴奉仕の魔女……P23
第三章：百合の慰め……P41
第四章：堕ち狂う二人……P56
エピローグ……P91
奥付……P98

【第一章：聖処女の谷間】

（早く何とかしなくては！　この状態は……いけない！）

両腕を絶え間なく動かしながら、ジャンヌ・ダルクは心中で焦りの声を上げる。しかしいくら念じても強大な力に支配された身体は自由にならない。

服から露出させられた乳房が踊る。そのたびに男の荒い息遣いが聞こえて来る。

ぬちゅっ。にちゅっ。ぷにゅ。

谷間で淫猥な音が響く。真っ白な肌の間からは赤黒の先端が出入りしており、青臭い雄液を擦り付けていた。そのニオイにジャンヌは思わず咳き込んでしまう。それほどまで強烈な雄臭。こんなニオイ嗅いだことがない。

「ふむ。これがパイズリか。なかなか良い物だな。人間の発想力も大したものだ」

視線の先で男が感心したように頷き、弄ぶようにペニスを跳ねさせる。胸から躍り出そうになるそれを、ジャンヌの身体は勝手に追って、パイズリを続けてしまう。

両手がぎゅっと乳房を寄せた。ペニスに対する圧力が増し、その先端から透明な汁が湧き出てくる。

（どうにかこの術を解かないと！）

自らの身体を縛る男の術。それから脱出する手段を探しながら、ジャンヌは胸奉仕を続けるしかなかった。

◆

標高六千メートルの雪山。そこに人理継続保障機関フィニス・カルデアは存在する。

人類の未来を守るという大義のもと、英霊との契約やレイシスト（非タイムトラベル）を生み出したこの施設は、人理焼却と言う未曽有の危機に唯一対抗できる存在であった。

人理焼却。

人類の積み上げてきた文明・文化・歴史の全てを焼き捨て白紙にしようというその脅威を、カルデアはマスターとサーヴァントの絆によって回避した。

世界は救われたのだ。

しかし、人理の危機を回避してなおこのカルデアに残るサーヴァントは多い。未だ人理焼却の影響は世界に燻り、様々な異常を生み出している。それを懸念して自らの意志でカルデアに残ったのだ。

ジャンヌ・ダルクもそんなサーヴァントの一人であった。

「今日の礼拝もよいものでした。やはり信仰について語り合うのは楽しいですね。オルタも来ればよかったのに。いつも

逃げられてしまうんですよね」
口元に笑みを浮かべながら、ジャンヌはカルデアの廊下を歩く。
毎朝の礼拝は生前からの習慣である。カルデアスタッフの好意で部屋の一つを礼拝堂として解放して貰っているので、そこで日々主への祈りを捧げている。
礼拝堂に通うのは自分だけではない。同じ信仰を持つ者たちと共に祈りを捧げ、信仰についての話を弾ませる。その時間がジャンヌはとても大切なひと時となっていた。
ジャンヌ・オルタ――自分とそっくりな自分とは違う彼女にも参加してみないかと勧めているのだが「反吐が出るわ」の一言で逃げられてしまって、勧誘に成功した試しがない。
（明日は絶対連れて行きましょう。きっと彼女も気に入るはずです）
そう心に決めてジャンヌは廊下を行く。するとすれ違った男性職員がチラチラとこちらを見ていたことに気づいた。
（？　何か付いているのでしょうか）
休憩室にあった鏡に自分を映して見る。顔には何も付いていない。ジャンヌはその場でくるりと回ってみた。ふわりと蜜を流したような金の髪が左右に揺れた。腰まで届く三つ編みはジャンヌのトレードマークである。
身体の前では豊満な乳房が揺れる。自分ではよくわからないが他のサーヴァントたちと比べてもかなりの大きさらしい。服を着ていてもそれはぷるぷると震え、柔らかさを主張しているように思える。
ついでに腰をひねって尻を掴んでみた。むにむにとした感触が手の平に伝わって来る。そういえばダ・ヴィンチちゃんからは安産型がどうとか言われた記憶がある。あれはどういった言葉だったのだろうか。
「別に変な所はない、ですよね？」
なぜ男たちが視線を送って来たのだろうか。その疑問を抱えたまま、ジャンヌは腕組みをして首を傾げる。そんな無防備な仕草が、余計に男を惹き付けていることにジャンヌは気づかない。
「すみません、ジャンヌさん。ちょっといいですか？」
「はい？」
振り返ると白衣を着た男性が駆け寄って来ていた。見覚えはある。たしかカルデアのスタッフの一人だ。
背丈はジャンヌより少し高い。この一年の動乱でやつれたのか、身体付きは細身でいかにも研究員という印象だった。
「なんでしょうか。えっと……」
「ああ、すみません。ちょっと聞きたいことがありまして。お時間いいですか？」
「ええ、大丈夫です」

安堵の表情になる彼にジャンヌもつられて微笑んだ。
「何か火急の要件でしょうか？」
「いえ、いくつか確認したいことがあるだけです。立ち話も何ですから少し座りませんか。ちょうどあそこが私の部屋ですからどうぞくつろいでください。お菓子くらいなら出せますよ」
「お菓子ですか。それはいいですね」
思わず顔が綻んでしまう。聖女というイメージが崩れてしまうのであまり知られないようにしているが、ジャンヌはかなりの健啖家なのだ。もちろん甘いお菓子も大好物である。
「ではどうぞ。そこの椅子に座ってください」
「ええ。お邪魔するわ」
柔和に笑む彼に促され部屋の中に足を踏み込む。
扉が閉まる音が聞こえた瞬間、ジャンヌの意識はスイッチを切られたように途切れた。

（えっと、私は何をして……）
気が付くとジャンヌは変わらず部屋の中にいた。
違う点があるとすれば彼の顔が下卑た笑みへと変わっていることだろうか。まるで発情中の豚を見るような、不遜で傲慢な顔だった。
「こうもあっさりと仕掛けにかかるとはな。英霊ジャンヌ・ダルク。催眠完了だ」
そう言って彼は無作法に顔を撫で回してきた。無遠慮で気遣いの欠片もないその手つきに嫌悪感を覚えるが、それが顔に出ることは無かった。
「こんな女達に負けたのだからわからないものだ。だがそこにこそ私が求めているものがある。――命ずる、ジャンヌ・ダルクよ。胸をはだけろ」
「は、はい。わかりました」
男の言葉がどこか遠い事のように聞こえる。音は聞こえているのに頭が意味を理解できないのだ。それなのに身体の芯にまでその命令は響き、抵抗することすら考えつかせない強制力となる。
（胸をはだける？　なぜ？　でも彼が言ったのだから従わないと。それは当然のことなんだから）
ジャンヌは自らの手を胸元に伸ばし上着を持ち上げる。上着の端に引っかかった乳房がぐっと持ち上がる。無理矢理に引っ張り上げられた双丘は上方向に伸びていき、それが限界まで張り詰めた時、
ぷるぷるんっ！
乳房が弾けて揺れた。しばらく震えていた胸だが、肌の張りが振動を抑えていき、ツンとはった美巨乳が姿を現す。
「ほほう、これがジャンヌの乳房か。いや、ここはおっぱい

と言った方が雄らしいか？　整った形だ。大きさも手で包めない程ある。いわゆる巨乳という奴だな。さて、感触はどうだ？」

男の右手が広げられ、包み込むように乳房に触れた。ぴくっと背筋が震えてしまう。そのまま力を込められると、むにゅっと音を立てて指が沈み込んでいく。

「おおっ、これはすごい！」

興奮気味に言いながら男は左手でも乳房を掴んだ。乳首に指が当たり、わずかな痛みが走る。

「泡のように軽い手触りなのに柔らかく、指をふわりと受け止めて来る。それにこの温かみ、人肌のぬくもりとはこういうものか。なるほどなるほど」

感心するように男は両手を広げ、豪快に胸を揉みしだいてきた。親指と人差し指の間に乳首を据えておっぱい全体をマッサージする。強く握り締められれば指の間から柔肉がむにゅっとはみ出し、手を離せばぷるんっと元の形に戻る。それを愉しむように執拗な愛撫がくり返される。

「ふむ。面白い。まるで魔術を見ているようだ。人体の神秘と言う物も興味深い物だな」

「んっ……！」

乳首に指が触れた瞬間、思わず声を上げてしまった。反射的な物でジャンヌ自身なぜ上げてしまったのかわからない。だが男にはそれが大きな発見だったらしい。

「なるほど。乳房の中で乳首が一番感じるのだったな。こんな感じか？」

男は親指と人差し指で乳首を挟み込み、中から絞り出すように揉み上げる。力を込めてぎゅっと肉を寄せられると、身体の中から何かがこみ上げるような不思議な気持ちになってしまう。

見れば自身のピンク色の乳首はぐぐっと持ち上がり、充血していた。それに伴い感覚も先端に集まっていく。空気の震えや手の熱さまで伝わるようだ。意識を集中すれば彼の指紋の凹凸まで感じ取れるだろう。

「あ、あんっ」

きゅっと指で先端を摘まれると声が出てしまう。同時に身体の奥に電気のようなビリビリとした刺激が走る。

「いい声だ。なるほど人間はこの響きだけで発情できるのだな。触覚に聴覚、では次は味覚と嗅覚も満たして貰おうか」

にやりと笑みを浮かべ、男は自らの唇を舐めた。そして突き出されたままの乳首に向かい、顔を寄せていく。

ちゅくっ。

「あ、ふぅぅ」

桃色の先端が男の口の中に吸い込まれた。温かな体温に身体から力が抜ける。だがその後の吸引は痛いほどの刺激にな

った。
「これが聖処女の乳の味か。甘く、わずかに塩気が混じったミルクの味だ。汗の味も混じっているのかな。しかし良いものだ。香りも肉欲をそそってくる」
まるで赤ちゃんのように男は乳首を吸ってくる。それだけではない口の中でも舌先で舐めてきて乳頭をしっかりと刺激してくる。
「実際に母乳が出ているわけではないはずだが、バニラのような芳香が漂っている。ふむ。これに人間の雄が夢中になるもわかる気がするな」
ちゅる。ちゅぷっ。れろれろっ。ちゅぱっ！
激しい音を立てながら男は乳房にむしゃぶりつく。右手で片方の乳房を揉みし抱きながら、餌に食いつく魚のように左胸を味わい尽くす。
（な、何をしているのです？　あなたは赤子ではないのに。それにお乳だって私は出せないのに）
夢心地のような意識の中、ジャンヌはただただ困惑する。こんなことをする意味がまるで理解できない。
だが不思議なことに、胸を揉まれ、乳首を吸われるたびに、ジャンヌの身体は熱く火照って来ていた。肌は紅潮し、胸からもしっとりとした汗が染み出し始める。それさえも男は美味だというように舌で舐め取ってしまう。
「呼吸の乱れと発汗を確認した。感じているな、ジャンヌ」
（感じる？　感じるとは何なのでしょうか）
初めて聞く単語に心中で眉を寄せる。この身体の火照りが感じるということなのだろうかと漫然と考える。
「ちゅぱ……次はこっちの乳首だ」
男は気まぐれに吸う乳首を変えた。左の乳首を吸っていたと思えば、右の乳首に移動する。もちろんその間も指先で空いた乳首を刺激するのも忘れていない。
吸引、舌舐め、指。その三種の刺激にジャンヌは知らず知らずの内に呼吸が荒くなっていた。身体の奥にある不思議な感覚も次第に大きくなっていく。
「同じ人物の乳首だと言うのに左右で微妙に形や硬さが違うな。生活の習慣によるものか、はたまた生まれ持っての形なのか。ん？　お前はこっちの方が良く反応するな。右乳首の方が感じやすいのか？」
「んっ、あ、あくぅ」
ぢゅぅぅぅう！
強烈なバキュームを受けてジャンヌは口から舌を垂らして、ぶるぶると背中を震わせる。男はそのまま歯を立て、硬く凝った乳首を噛んできた。もちろん血が出るほど強く噛まれたわけではないのだが、それだけでジャンヌはびくんっと全身を震わしてしまう。まるで敵からの攻撃をモロに受けて

しまった時のようだ。
じゅんっ！
不意に下腹部に違和感を覚える。股間が途轍もなく熱い。その上、お漏らしをしてしまったような、爽快な開放感もあった。
（今ので漏らしてしまった？　いえ、そんな感じでもありません。それになんだが……粘っこい？）
今まで経験のない身体の変化にジャンヌは困惑する。だがそれで何をしようとする発想はできず、ただされるがままになるだけだった。
「十分に発情したようだな。では、そろそろ俺の方も楽しませて貰うとするか。ジャンヌ、俺のズボンからペニスを取り出せ」
「は、は……い」
乳房を露出したままジャンヌはその場にしゃがみ込んだ。目の前に男の股間部がある。
（ペニス……男性の性器のこと？　それを取り出す？　どうして？　おしっこでもするの？）
疑問は尽きないが、それを口に出すことはできない。まるで糸に吊られた人形のようにジャンヌは男のズボンに顔を寄せる。
見ればそこはぷっくりと膨らんでいた。どうやら中に何か硬いものがあるらしい。ジャンヌはズボンのベルトを外し、足首まで下ろしていく。次に現れたのは白い下着だ。その前部分はなぜかシミができており、据えたニオイが漂っていた。よくよく見れば下着の裾からは妙な肉質が覗いている。きっとこれがペニスだと、男の股間をまともに見たことのないジャンヌは結論付ける。
パンツのゴムを広げてずり下ろす。途中、自分の胸をはだけた時のような抵抗があった。
ぶるんっ！
抵抗を超えた瞬間、目の前で赤黒い棒が上下した。
それはジャンヌを見つめるように二つに割れた先端を向けていた。だが、すぐにムクムクと膨張しながら起き上がり、筋張った形を露わにする。
（とてもグロテスク……これがペニス？）
初めて見る男性器をジャンヌはただ気持ち悪いと感じていた。まるで内臓のような色と形だし、表面には無数の血管が走っている。先端部はつるんと光沢を帯びているが、その周りには茶色の皮が被っていた。
そして何より先端から出る透明な汁が問題だ。それが何なのかジャンヌにはわからなかったがそれは酷く臭った。まるで発酵の進んだチーズのような強烈なニオイだ。これを嗅ぎ続けていたら鼻がひん曲がるに違いない。

（だけどどうして……目が離せない）
心中の評価とは裏腹にジャンヌはそれを凝視していた。ビクビクと震える動きに合わせて視線が上下する。つーっと流れ落ちる透明な汁に自然と口の中にツバが滲み出る。
「まずは手でして貰おうか。こいつを握り、前後に動かせ。丁寧にな」
「は……い。ペニスを握って動かせばいいのですね」
肌が触れた瞬間、喜ぶようにビクンと竿が反応する。それは焼けるように熱かった。その上、全体がぬるぬるとしており油断すると手の中から滑ってしまいそうだ。命令をこなすため、ジャンヌは両手で包み込むようにペニスを握る。ちょうど旗を握る時のようだとぼんやり思った。
しゅっ、しゅっ、じゅっ、じゅくっ、にちゃっ。
リズムカルに動かされる両手。言われた通りの丁寧な手つきで、根元から先端までを指で撫でる。
「いいぞ。その調子だ。少しペースを上げろ。それと、こちらを見上げるんだ」
「ん、これでいいでしょうか？」
手のスピードを上げて、じっと男を見つめる。何が楽しいのか男はジャンヌの顔を見つめてにやにやと笑っていた。
「ジャンヌ、何かおかしいと思わないのか？」
唐突な質問にジャンヌは答えに窮した。言われた通りペニスを取り出し、手で擦っている。これの何がおかしいのかジャンヌにはわからない。
「自分が何をしているかわかっているか？　説明してみろ」
「あなたの生殖器を握り、両手で扱いています。乳首勃起させたデカパイも恥ずかしげもなく晒して、プルプル震わせています。何かおかしいでしょうか？」
「くっ、くく！　いや、何もおかしくないな。そのまま続けてくれ。あ、それと生殖器やペニスじゃなくておチンポと呼ぶようにするか」
「はい。では、おチンポを扱くのを続けます」
なぜか笑いこらえる男にジャンヌは首をかしげる。だが男の命令にも逆らう気にならない。言われた通りにおチンポを扱き続けていると、浮かんでいた疑問も時間の中に溶けて行った。
しばらくすると肉棒はさらに体積を増し、皮に包まれていた先端部分も大きく露出するようになった。透明な液は先端部分全体に広がり、ジャンヌの指にも絡んで来る。白く細い指先が「にちゃにちゃ」と音を立て、白い糸を引いている。
「よし。そろそろだな」
ぶるりと男は腰を震わせた。最初よりもかなり呼吸が荒くなっている。心のなしか手の中のペニスも一回り膨張しているように思えた。

「そのまま一気に扱き上げろ……ぐっ……出すぞ……！」
ジャンヌは言われた通り手を動かす速度を上げた。早く大きく手の平を動かし、先端部分にも指を絡めて擦り上げる。
じゅっ！　ちゅくっ！　にちゅっ！　ちゅちゅくっ！
音も大きく粘つくものになっていた。手の中の熱はさらに高まり、本当に燃えてしまう気さえする。見上げる男の顔は苦しむような喜ぶような不思議な表情で、何かに耐えるように歯を食いしばっている。
手の中で何か白い物が飛び出した。それを呼び水にしたようにペニスがビクビクと震え上がる。
「出るッ！」
びゅぶっ！　びゅぐっ！　びゅびゅっ！
男のペニスから白い物が飛び出してくる。股間の目の前にいたジャンヌはそれをモロに浴びる位置にいた。だが避けるという選択肢が浮かばない。
真っ赤に充血したそれが何度も震えて白い物を吐き出すのをただ見続けてしまう。
飛び出た液体にはヨーグルトのような粘性があり、最初に嗅いだペニスのニオイを何十倍にしたみたいに臭かった。
銀色のサークレットに付着したそれはどろりと後を引きながら滴った。金色の髪にも沁み込み、じっとりと髪間を濡らしていく。もちろん顔にもぶちまけられ、頬にペニスの温度をそのまま移すような熱さが広がっていく。そして鼻から流れ落ちたそれが唇の中へと滑り込む。予想通り、酷く苦い味が舌の上を転がった。
「よし。止めろ」
ぴたりと両手で肉棒を握ったまま、ジャンヌは身体を制止させる。そこに何の疑問もない。ただ次の命令はなんだろうと男を見上げ、臭い液に塗れた顔を彼に向ける。
「ふむ。これだけの刺激でも解けないか。催眠は完璧に効いているようだな。よし、起きろジャンヌ」
まじまじと顔を覗き込んでいた男が指を鳴らした。その瞬間、頭の中が一気にクリアになる。
「――え？」
まず感じたのは猛烈な臭気だ。口の中が苦い。白濁液が鼻の中にまで入っていてすさまじい異臭となっていた。
「な、なにこれは！　うぷっ！」
「吐くな。せっかく出してやったんだぞ？」
「っっ！」
たった一言でジャンヌは吐き出すと言う単純な動作を止められた。そうなると異物感や臭気はジャンヌの中に戻って来る。一度新鮮な空気を吸い込んでしまったからか、余計にそのニオイと味が感じ取れてしまう。ジャンヌは極力それを意識しないよう「ふーふーっ」と鼻で息をつきながら呼吸を整

える。
（何が起こっているというの？　ここは？）
吐き気に耐えながらジャンヌは視線を巡らせる。ここはどこで何をされたのか。確かに自分はカルデアのスタッフに呼ばれて部屋に入って、それで――、
「流石英霊だな。この状況で中々に冷静だ」
「あ、あなたは……なっ！」
そこで初めて、ジャンヌは自分が男の股間を握っていることに気が付いた。すぐに手を離そうとするが指が開かない。まるで石にでもなったかのようだ。
「無駄だ。返してやったのはお前の意識だけだからな。身体の方はまだ俺の支配下にある」
何でもないように言いながら男は腰を前後に振る。手の中で白濁した液が泡立ち、ジャンヌの背筋に鳥肌が立つ。
忌々しくペニスを握り締めながら、ジャンヌは上目遣いに男を睨みつける。男は肩を竦めおどけるように答えた。
「おいおい。この顔を見忘れたのか？　いつもカルデアの管制室にいただろう？」
「違います。確かにスタッフの一人に顔も姿もそっくりですが、あなたは……異様です」
英霊としての直感が警告を鳴らしている。確かに姿も声も見知ったスタッフの物だが、ジャンヌはこの男の中に底知れない邪悪さを感じ取っていた。
「伊達にルーラーではないか。観察眼は大したものだな。だが外れだ。俺は間違いなくカルデアスタッフの一人だ。少なくともこの『身体』はな」
男は笑い、その瞳をジャンヌに近づけた。瞬間、凄まじい悪寒が全身を駆け巡る。この感覚をジャンヌは知っている。強大な魔力と支配力。それを兼ね備えた人外の魔性。そしてそれは、絶対にありえない存在の気配だった。
「ま、まさか――魔神柱」
「ご名答。俺はシトリー。魔神柱シトリーだ」
魔神柱。それは人理焼却を目論んだ全ての黒幕の名だ。カルデアは特異点にて幾度となく魔神柱と戦い、窮地に追いやられた。
だが魔神柱の大半は最終決戦の地で倒れた。シトリーという魔神柱もまた消滅したはずだ。
「そう、確かに俺はあの地で消滅した。だがそれは物事の一面でしかない。あの戦いの中、俺は自身の精神をカルデアへと送り、一人の人間の精神を奪い取ったのだ。力の大半を捨ててていたためにお前たちも気づかなかったようだな。
お前たちに倒されたのはその残滓、言ってしまえば機能としてのシトリーだ。そしてシトリーの意思である俺はこうして身を隠し、機を伺い続けていた。我が胸に宿った命題。そ

の答えを得るために」
悠々とシトリーは語る。その頬にはいつしか熱がこもり、己の語る命題とやらに酔っている様子だった。
「め、命題……一体それは」
「性欲だ」
「え？」
思わず変な声が出た。彼が何を言ったのかすぐには理解できなかった。まさか世界の歴史そのものを消し去ろうとした者が、そんな下品な動機を持つはずがないと無意識の内に考えてしまったのだ。
だがシトリーはどこまでも真剣な様子で自らの股間を凝視する。
「色欲、肉欲、劣情、セックス……お前たち人間はこと性欲に関してとても強い力を発揮する。それはとても種の保存本能という言葉では理解し切れない。不可能と思える難題ですら性欲一つで乗り越えてしまう。
一方で欲望に溺れ、その身を滅ぼすこともある。果たしてそれはなぜか。この身が魔神であった時には抱くことのなかった感情、性欲。それを理解するために俺は魔神の身体を捨て、人間となったのだ」
ジャンヌは絶句した。
貞潔を是とする彼女の宗教では、性欲はむしろ罰せられるべき醜い欲望だ。性交とは子を産み育てるという偉業のためのステップであり、それ自体を求めるなど堕落者のやることだ。当然その意識はジャンヌの中にも深く根付いている。
だからこそジャンヌは性交はおろか自慰すらしたことがなく、聖処女などという異名を得るに至ったのだ。
「理解できないという顔をしているな。だが俺の見てきた歴史では神代から現代に至るまで、人間は性欲のために生きて戦っていたぞ。性欲がない時代など一瞬たりとも存在しなかった。戦争にせよ平和にせよ、その背景には性欲の連鎖が必ずあった」
「そ、それは」
「お前の宗教では性欲を禁止していたようだが、現実はどうだ。自慰をする貴婦人、修道女を襲う神父。どれだけ法と秩序で縛ろうとも人は性欲を捨てられなかった」
ぐっ、とジャンヌは言葉を詰まらせた。
ジャンヌとて戦場を駆けた戦士だ。教会の腐敗を知らない初心な村娘であったのは過去の事、戒律を守らず淫濁に陥る者が居ることくらいは知っていた。ジャンヌは神を信じている。そして神のために性欲を捨てて、信仰に身を捧げることができる。だがそれを全ての人々ができるとは流石に思っていなかった。
「性欲には抗えぬ力がある。それが私の出した結論だ。人間

はもちろん時に神ですら抗えない傲慢なる衝動。
その正体を俺は知りたい。そのために魔神の力を捨てた。とはいえ、観察と実験のための能力は残しているがな。たとえば――ジャンヌ、胸で俺の男性器を挟め」
「そ、そんなことするはずが……な、い、いや！」
口では拒絶を言うが、ジャンヌの身体は言われるままに胸を持ち上げ、シトリーの股間へと身を寄せてしまう。まるで手足が他人の物になってしまったかのようだ。
巨大な乳房をぐいと広げる。衣服の中に閉じ込められていたそこは、汗でサウナのように蒸れてしまっていた。蒸れ蒸れの谷間にペニスを寄せて閉じ込める。むにぃと圧迫された双丘はシトリーの生殖器を埋めてしまった。
「お、おお……これも良い。ムッチリとした肉が股間を挟み込む。この身体の肉棒はさほど大きくはないとはいえ、先端部をわずかに覗かせるくらいにまで埋めてしまうとは予想外だ。くぅ、なるほど。これが乳の間の感触か」
「な、何をさせるのです！　こんなことに何の意味が」
「ふむ。やはり知らないようだな。パイズリだ」
「ぱ、ぱいずり？」
全く未知の単語だった。だが、この状況からしてロクなものではないことだけはわかる。
「パイズリは胸の谷間で男性器を刺激する性技だ。お前のような乳のデカい女でなければできないことだ」
「む、胸で刺激を……な、なんて冒涜的な！」
かっ、と頭に血が上る。それに対してシトリーは押し殺した笑いを上げるばかりだ。
「何がおかしいのですか！　乳房とは赤子に母乳を与える大切な場所です。それを性欲の発散のために、おチンポを――え、な、なぜ私はこんなお、おチンポなんて言葉を！」
口から飛び出した卑猥な言葉に顔が赤くなる。おチンポ。こんな単語知るはずがないのに、どうしても生殖器をそう呼んでしまう。
「ははは っ！　本当に面白い奴だなジャンヌは。だからこそお前を選んだ価値があるというものだ。不足する知識。それに相反する男を引き寄せる身体。そして高潔な魂。それらを兼ね備えた興味深いサンプルだ。ジャンヌ・ダルク。くくっ、知っていたか？　カルデアのスタッフもお前の身体に欲情していたことを」
ジャンヌは目を見開きシトリーを見つめた。
「どうした？　まるで神などいないと言われたような顔だぞ。当たり前だろう。この男の手に余るような巨大な胸。子を産むために作られたようなでかい尻。それらを支える鍛えられた腕と足。そんな身体を無防備に晒す貴様の態度。どう見ても誘っているようにしか思えんぞ」

「や、やめなさい！　動かさないで！」
腰を前後に揺するシトリーに、ジャンヌは思わず叫んでしまった。胸の間で擦り付けられる粘液の感触がおぞましすぎた。これが人間の発想だなんてとても信じられない。
「吐息がかかって気持ちがいいぞジャンヌ。なるほどこれは面白い。ただの圧迫の刺激だけでなく女の反応でも男は性欲を増させるのだな」
新たな発見が嬉しいのか、シトリーは口端を歪めて腰を動かし続けた。一度射精してサイズを落としていた肉棒も、もう勃起を取り戻している。それどころか、むしろさっきよりも大きくなっているほどだ。
自身の谷間から顔を出すペニスは、まるで異世界から現れた怪物のようにジャンヌには思えてしまう。
「さあジャンヌ、パイズリを始めろ。お前のその胸で俺の性欲を満たすのだ」
「や、やめ！　くぅぅぅっ！」
むにゅっ！　にゅくっ！　にちゅにちゅっ！
乳房を掴んだ両手が勝手に動き、陰茎を圧迫しながら上下に動く。同時に腰も自然と上下してしまい身体中でシトリーのイチモツを揉み上げていた。
「やっ、くっ、こ、こんな近づいて……んんっ！」
「ふむ。これがパイズリか。なかなか良い物だな。人間の発想力も大したものだ」
感心したようにシトリーが言う。だが当のジャンヌはそれどころではない。
身体が下に落ちるたび、顔の目の前にグロテスクな先端が近づいてしまう。異臭を放つそれが頬にくっ付きそうで、ジャンヌは必死に顔を背ける。
「ジャンヌ、俺のチンポを見ろ」
その一言でジャンヌの淡い抵抗も奪われた。視線は真っすぐに胸の谷間に向けられ、白い肌の間からにゅくにゅくと顔を出す赤黒い肉を凝視してしまう。
「こ、こんな不潔な物を見せて何が楽しいのですか！　あなたは間違っています！　もしあなたに人の心が残っていると言うなら――」
「どうなっているか報告してみろ」
その一言でジャンヌの説得は強制的に打ち切られた。
「わ、私の胸の中でおチンポが踊っています。左右に振れるのをおっぱいで挟んで逃がさないようにしています。時折ビクビクと震えて臭い汁を出しています。谷間はもうこの汁で濡れてしまい、にちにちと卑猥な音を立てています。その上、ここからは先端が見えていて……く、臭いです」
「それだけか？」
シトリーの問いかけに、身体の奥底でくすぶっている感情

が鎌首をもたげる。ダメだとそれを抑え込もうとするのに、それは言葉となってジャンヌの理性をするりと抜けていってしまった。
「わ、私は発情しているのだと思います。このニオイを嗅いでいると身体の奥が熱くなるのです。とても臭くて酷いニオイなのに、鼻の奥にこびりついて離れないのです。ドクドク脈打つおチンポも、醜いと思っているのにずっとこうしていたいと思うのです」
「ふむ。意識は拒絶しているのに身体は求めてしまうのか。人間と言う物は本当に不思議な生き物だ」
「――っ！　わ、私は！」
口の支配権が戻って来たが、何を言えばいいのかわからない。告白を強制されたとはいえ、今の言葉は自身の胸から湧き出たどうしようもない本心だ。虚言もまた大罪である。そしてジャンヌは神を背信することはできなかった。
「っ、あなたは最低です！」
ジャンヌができる抵抗と言えば怒りを視線に乗せることぐらいだった。だが、今の彼女が見ることができるのは勃起チンポの先端だけだ。カウパーの垂れ流れる亀頭を彼女はひたすら睨むしかなかった。
「なるほど。これが嗜虐心という物か。絶対的強者の権利の行使。うむうむ、これも面白い」
人間臭い笑いを上げて、シトリーが腰を揺すって来る。それだけで硬く反りあがった肉棒は乳房の間から躍り出てしまった。ジャンヌの身体は慌ててそれを追って再び谷間に収める。これではまるで投げられた棒を追いかける犬だ。
「上下だけでなく左右の動きもさせてみろ。両方一度に動かすのでは無く左右でタイミングをずらせ」
「そ、そんなことさせて……んんっ！　こ、擦れ方が変わって違うところが……っ！」
にちゅっ！　くちゅっ！　ずりゅっ！
左右の乳房を交互に上下させるジャンヌ。すると感じ方も変わり、さっきとはまた違う刺激となる。右の乳房が亀頭を撫でたと思えば左の乳房がたっぷりと根元を埋める。そしてそれが入れ替わり何度も繰り返される。肉棒も右に左に揺れて逐一違う刺激となる。
（主よ！　どうか私に御加護を！）
次々と襲い掛かる恥辱に耐えながら、ジャンヌはこの屈辱の時間が早く終わることをただ祈る。
だがそんなジャンヌに神はさらなる試練を与えた。
「舐めろ」
「……え？」
ジャンヌは呆けた顔で谷間を見つめ続ける。できることなら聞き違いであって欲しい。そう願うのに、シトリーは無情

はっ
はっ

の宣告をくり返す。
「聞こえなかったか？　ジャンヌ、俺のチンポを舐めろ。もちろんパイズリも止めるなよ」
さぁ、と血の気が引いた。
「や、止めなさい！　止めてください！　そ、そんなことおかしいです！　不浄の部分を舐めるなど！　ひっ！」
ぐっと谷間に顔を近づいてしまう。口が糸を引きながら広げられ、唾液に輝く舌が陰茎目指して伸びる。
「嫌、嫌なのに……むぐうううううっ！」
ぶちゅっ！
口に熱い感触が広がる。まだ男を知らない唇は、シトリーの亀頭によってファーストキスを奪われた。
その間にもパイズリは続けられる。今は再び上下運動に戻り、ペニスは出たり入ったりをくり返している。
「いいぞジャンヌ。これはいい。先っぽが舐められるというのは実に快感だ。さあもっと舐めろ！　舌を伸ばして先端を舐め尽くせ！」
「むぐうううううっ！」
ぎゅっと乳房を寄せてジャンヌは肉棒を口元へと寄せてしまった。そして真っ赤な舌を伸ばしてちろちろと先端の割れ目を舐め始める。
先走りの湧き出る穴を舌先でグリグリと刺激されるのが心地よいのか、シトリーは興奮気味に鼻息を荒くする。
さらにカリ首に舌を伸ばし、そこにあった白い塊もジャンヌは舐め取ってしまう。
「あぐっ、に、苦い……こ、こんな味……いやぁ……」
口の中に飛び込んできた硬いカス。それが唾液でふやけると、すさまじい苦みと悪臭が舌上に広がった。それは透明な液どころか精液の苦みをも遥かに超えている。男の欲望を煮詰めたようなその味に、思わず涙が浮かんでしまう。
「チンポを舐めると人は苦いと感じるのか。ではもっと深く口に入れるとどうなるのかな。しっかり咥えろ、ジャンヌ」
「ひっ！　やめっ！　んぶっ！　ちゅう！　ちゅっ！」
かぶりつくように伸ばした唇が先端を飲み込んだ。硬い肉の感触がほっぺたの中に納まり、シトリーもビクンと腰を震わせる。さらに口の中では舌が激しく動き、カリ首や筋を丁寧に舐めてしまう。
「これは素晴らしい。性欲に操られる人間の気持ちもわかってきた。あのジャンヌ・ダルクが、聖処女と呼ばれた英霊がデカパイで扱きながらチンポをしゃぶっている！　何と無様な顔だ！　何と素晴らしい官能だ！」
「んぶっ！　んんんっ！　ぶびぃ！」
ジャンヌ自身の意思と関係なく続けられるチンポしゃぶり。それを罵倒され、嘲笑され、支配される。

（くっ！　身体は好きにさせても心までは！）
そう心中でくり返すも、それは前向きな宣誓ではなく、心以外の逃げ場がない故の言い訳だ。
どれだけ心を強く保とうと、シトリーの命令に逆らうことはできない。今も嫌らしく動く唇は陰茎に吸い付いている。肉棒を口から逃がさないようにするためか頬は窄められ、みっともなく鼻の下を伸ばした顔になってしまう。
それがいわゆるひょっとこフェラと呼ばれていることをジャンヌは知らない。
だがじゅるじゅると音を立てながらチンポを啜る様が、この上なく無様であることだけはわかる。もし生前の自分を知る者が見れば間違いなく卒倒するだろう。ジルなんてそのまま心臓発作で死んでしまうかもしれない。
「よし出すぞ！　しっかり胸で扱いて口で吸い上げろ！」
「くっ！　ぶちゅっ！　ちゅっ！　ぢゅるるるるっ！」
機械のようなスピードでジャンヌは胸を震わせ、猛烈なパイズリを始めた。汗と唾液とカウパーのローションが谷間を熱くさせ、肉棒との間に強烈な密着度を生み出す。
口の方もすごい。亀頭をしゃぶりながらのバキュームはまるで掃除機だ。呼吸がなくても死なないサーヴァントの身体をジャンヌは初めて恨んだ。尿道から睾丸の精液を全て飲み干さんばかりの強烈な吸い上げに、シトリーの腰がガクガクと震える。
「出す！　出すぞ！　その整った顔で全部受け止めろっ！」
ジャンヌの胸の中で肉棒がさらに大きさを増す。それが何を意味するのか流石のジャンヌも理解できている。自由の利かない身体ながら必死に首を振って拒絶の意思を表明する。だがそれはシトリーの劣情をただ煽る結果となった。
「んぶうううう！　ずぞぞぞぞぞぞっ！」
ぶびゅっ！　どびゅっ！　びゅぶびゅぶぅぅぅぅうっ！
苦悶を叫びながらも身体は尿道に吸い付き、放たれる雄汁を残さず吸い尽くしていた。
青臭い味が口いっぱいに広がる。その勢いはすさまじく、思わず咳き込んだ拍子に「ぶびっ」と鼻の穴から逆流してしまった。
「しっかり根元まで咥えて、綺麗に飲み干すんだぞ」
「ふぶっ、しょ、しょんな……うぷっ、じゅるるるる」
自らの胸に顔を埋めて、ジャンヌはシトリーの股間を深く咥え込む。そのまま音を鳴らして表面に付いていた粘液を丹念に舐め取っていく。
ちゅっぽ！
口から離れた時、肉棒は磨かれたように輝いていた。亀頭のワインレッドにジャンヌの顔が映るほどだ。そこにいる自分は唾液と鼻水を垂らして、精液に塗れた顔でチンポを見下

ろしていた。どこから見ても淫乱女そのものだ。
「口を開けて見せて見ろ」
「あ、あぁ……んっ」
にちゃぁ。
歯の間に白い糸を引かせながらジャンヌは口を開く。そこには泡立つ生殖液がたっぷりと貯まり、真っ赤な舌が上下していた。
パシャッ。
そんな顔にシトリーはカメラを向けていた。
「ふえ？　な、なひを」
「写真を撮ったんだよ。ほら」
デジタルカメラの画面を見せつけられる。そこにはザーメンを便器のように受け止めるジャンヌの顔があった。もちろん丸出しの乳房もばっちり入っている。
「しっかりと記録を残さないとな。性欲によってお前がどう変化していくのか観察する必要がある」
これだけの辱しめを与えながら、シトリーはまるでマウスでも解剖したかのような冷たさでカメラを弄る。
悔しかった。だがジャンヌができることはザーメンを口に保持したまま、震える拳を握り締めることだけだった。
「よし。もういいぞ。しっかり味わってから飲み干せ」
「ん、ん～～っ！」
いやいやと首を振るが身体の方は止まらない。味わうという行為を効率的に行うためか、噛むように口が動き、ザーメンの味を味覚神経全てに擦り込んで来る。
「ぐちゅっ！　ぐちっ！　じゅぷじゅぷっ！」
歯茎に精子が絡まる。舌上でザーメンの塊が踊る。固めたヨーグルトのような感触が舌に触れると、ジャンヌの全身は鳥肌立っていた。
「……ごきゅっ！　ごくっ！　ごくんっ！」
そして始まる嚥下。唾液と合わさりドロドロになった精液が喉を流れて胃の中へ。わかるはずがないのに、精液たちがべっとりと胃にこびりついているように感じる。
「全部飲んだな。もう動いていいぞ」
口の中が空っぽになっていることを確認し、シトリーは指を鳴らしてジャンヌの拘束を解いた。
糸が切れたようにジャンヌはがくっと腰を落とす。
「げほけほっ！　こ、こんなことが隠し通せると思っているのですか……私がいなくなればすぐに誰かが気づきます！」
口を拭いながらジャンヌはシトリーを睨みつける。だが当人はまるで気にした様子もなく棚から小さな箱を取り出していた。
「この部屋から出ることができれば何とでもなる。そう思っているのだろう？」

その言葉にジャンヌは息を呑む。
「サーヴァントを支配するほどの魔術。それをカルデア全域で行使すれば露見するのは目に見えている。だから部屋から出ればその強制力は弱まるはず……まあ順当に考えればそうなるな。だから保険をかけさせてもらう」
そう言ってシトリーは用意していた箱から革製の首輪を取り出した。一見何の変哲もないように見えるが、それからは途方もない欲望と魔力を感じ取れた。
「俺が作り上げた魔術礼装だ。装着者の思考や記憶を操作して、その行動を制限する。お前が何を記憶し、どう考えるのかも思いのままだ。これを付けていれば部屋から出ようがお前は俺の支配から逃れられない。くくっ、手間だったぞ。カルデアに気づかれずにこれを作成するのはな」
「っ！　そ、そんなことが！」
「ここにいたことすら思い出せなくなるのさ。そしてこの首輪を付けていることを疑問にも思わない。もっとも、俺が合図を送ればすぐにパイズリチンポフェラをしたことを思い出すがな」
「ひ、卑怯者！　あなたは必ず裁かれる！　神はこんな振る舞いをお許しには――」
「それじゃあジャンヌ。また明日な」
カチャ。
軽い、本当に軽い音を立てて首輪が巻かれた。
それでおしまいだった。
「あれ？」
気が付くとジャンヌはカルデアの廊下に立っていた。
どうしてここにいるのか、今まで何をしていたのか、まるで思い出せない。しかしジャンヌはすぐにそれを疑問に思うことを止めた。
（思い出せないのなら、大したことではないでしょうね）
そう自分を納得させること自体が異常であることもジャンヌは疑問に思わない。
「あ～ら～、こんな所に聖女様がいらっしゃるわ。どうしたのかしら、また何の益にもならない奉仕活動に精を出していらっしゃるのかしらね」
そんなジャンヌの背中に、僻み精神満々の声がかかる。
自分とそっくりな、しかし色彩を反転させたような容姿を持つ少女。ジャンヌ・ダルク・オルタだ。
色々とややこしい経緯を持って生まれた彼女は、何かにつけてオリジナルである自分に絡んで来る。
だがジャンヌとしてはそんな彼女をちょっと背伸びしたい妹のように感じてしまい、嫌味を言われても邪険にはできなかった。

軽く笑いかけてあげると、オルタはげーっと吐き戻すような仕草をしてくる。
「あーやだやだ。良い子ちゃんぶっちゃってさ。これだから聖人ってのは気に入らないのよ」
「私はオルタのこと好きですよ？」
「はいはい。そうですね。私もあなたのこと好きですよー」
「ふふっ。嬉しいですね」
「皮肉よ。皮肉。これだから文字も書けない田舎娘は」
こんなやり取りもいつものことだ。だがオルタはふと、ジャンヌの首を注視する。
「あんた、そんなチョーカー付けてたっけ？」
「え？」
見ればジャンヌの首には黒いチョーカーが巻かれている。いや、チョーカーと言うには武骨過ぎる。これは完全に首輪である。
こんなものいつの間に付けただろうか。だが邪魔にはならないし、理由はないが外してはいけないと感じる。
「うわ、ダサッ。ないわー、それはないわー」
「大丈夫ですよ。オルタもきっとすぐに付けますから」
「は？　どういう意味よそれ」
「？　いえ、どういう意味でしょうか」
突然口から出た言葉に自分で不思議になるジャンヌ。
しかし考えても答えは出ず、ジャンヌはオルタと別れて再び歩き出す。
その首元では首輪が不気味に揺れ続ける。

続きは本編で！